

9. 農 学 部

I	農学部の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	9 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	9 - 4
	分析項目 I 教育活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	9 - 4
	分析項目 II 教育成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	9 - 21
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	9 - 26

I 農学部 of 教育目的と特徴

佐賀大学の学士課程教育においては、新たな教養教育システムを創出し、豊かな教養を体系的に身に付け、各専門分野の学識に裏付けられた創造力、課題探求・解決能力を育成することを目標として掲げている。また、佐賀大学農学部の目的は、日本有数の食料生産基地である佐賀平野に立地することから、「食糧」、「生命」、「環境」、「エネルギー」、「情報」、「地域社会」という重要な課題を解決するための総合科学である農学の発展と、社会的に活躍できる人材の育成である。

この目的を達成するために農学部は、学部設立時（昭和 30 年）から現在に至るまで、我々の生活に必要な生物の生産と利用に関わる教育を通して、人類の繁栄に貢献できる豊かな教養と深い専門知識を備えた人材を育成してきた。さらに、H22 年度から始まった第 2 期中期目標期間においては、3 つの方針（学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学受入れの方針）によって貫かれる教育方針に沿って、教育の質の改善のための PDCA サイクル機能を強化した。農学部における学部教育の特徴は、学生と教員の間のコミュニケーションを重視しながら、卒業研究の完成をゴールとする、農学教育の実践にある。

【3 学科の教育目的】

農学部は、応用生物科学科、生物環境科学科、生命機能科学科の 3 学科（生物環境科学科は 3 コース）から構成されており、それぞれの学科（コース）の教育目的は、次の通りである。

応用生物科学科の目的は、生物の特性を理解し、生物の改良や活用を通して、社会に貢献できる人材を育成することである。

生物環境科学科（生物環境保全学コース）の目的は、地球上の環境や生態系を深く理解し、これらの保全、再生及び活用を通して、社会に貢献できる人材を育成することである。

生物環境科学科（資源循環生産学コース）の目的は、生物科学及び生産情報科学の理論と技術を学び、環境に配慮した食糧生産と環境問題の解決に貢献できる人材を育成することである。

生物環境科学科（地域社会開発学コース）の目的は、フィールドワークに基づく教育研究を通して、日本を含むアジア・太平洋諸地域における、持続可能な循環型地域社会の構築に貢献できる人材を育成することである。

生命機能科学科の目的は、科学的思考力を備え、生命科学技術の応用を通して、食と健康の分野において社会に貢献できる人材を育成することである。

【入学者の状況等】

学生定員および現員は、定員の通り 1 年次は 110%以内である（表 1）。また、農学部入学者の出身都道府県別状況を見ると、入学者数の上位 3 県が福岡県、佐賀県、長崎県からの入学者が全入学者数の約 8 割を占めており（表 2）、本学の目指す地域と共に未来に向けて発展し続ける大学としての役割を果たしている。更に、男女比は年度によって多少の増減はあるが、近年の女子学生の農学人気の高まりによって、ほぼ 4：6 程度を保っている。

表 1 農学部 of 入学定員と現員

(H27. 5. 1)

学科	入学定員	現員			
		1 年次	2 年次	3 年次	4 年次以上
応用生物科学科	45	46	49	51	61
生物環境科学科	60	62	65	70	72
生命機能科学科	40	43	41	46	43

（出典：佐賀大学入学者選抜要項ならびに資料 A2-2007 入力データ集：No. 3-1 学生年次別）

表 2 農学部入学者の出身都道府県別状況

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
佐賀県	39 (21)	36 (21)	27 (19)	33 (16)	46 (25)	33 (20)
福岡県	69 (42)	75 (36)	70 (42)	66 (40)	65 (36)	70 (40)
長崎県	17 (10)	20 (12)	21 (17)	22 (16)	19 (13)	15 (13)
九州他県	20 (15)	16 (9)	24 (18)	18 (10)	16 (9)	26 (14)
九州以外	9 (4)	9 (3)	10 (3)	13 (4)	12 (6)	7 (4)
合計	154 (92)	156 (81)	152 (99)	152 (86)	157 (89)	151 (91)

※ () 内は女性数

【想定する関係者とその期待】

農学部教育の目的と特徴と対応から、学部教育の関係者と関係者の期待を、次の通り想定している(表 3)。

表 3 教育面からの農学部が想定する関係者と関係者の期待

想定する関係者	関係者の期待
入学志願者	農学部教育の目的・目標の分かりやすい公表 入学志願者に対する多様な説明機会の提供（オープンキャンパス、ジョイントセミナー等）
在学生	学生の期待に応える体系的なカリキュラムの編成 学生の学習意欲に応える、分かりやすい授業の提供 学生が学習しやすい環境の整備
卒業生	社会人として活躍するために必要な教養と専門知識の修得 卒業後も相談に乗れる学部の体制整備
在学生の保護者（家族）	学生に対する良好な学習環境の提供、学力の定着、就職・進学
卒業生の受入れ企業・ 地方自治体・国	社会生活に必要な教養と職務遂行に必要な基礎的な専門知識 自ら学び取る積極性を持つ人材の育成
地域社会	地域社会と地域産業の理解者と、地域の担い手の育成
本学の教職員	本学および農学部の理念・目標・目的を達成するための教育活動を実践しやすい組織・制度の整備

Ⅱ 「教育の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ 教育活動の状況

観点 1-1 教育実施体制

(観点に係る状況)

1-1-1 教員組織編成や教育体制の工夫とその効果

農学部では、学則に記載されている学部の目的に沿って、3学科、7講座を設置している(表4)。また、フィールドワークに基づく教育研究を実施するために、附属アグリ創生教育研究センターを設置している。

表4 教育研究組織

学科	講座	教育研究分野
応用生物科学科	生物資源開発学	熱帯作物改良学, 動物資源開発学, 植物代謝解析学, 蔬菜花卉園芸学, 果樹園芸学, 植物遺伝育種学
	生物資源制御学	植物病制御学, 植物ウイルス病制御学, 線虫学, 昆虫学, システム生態学, 動物行動生態学
生物環境科学科	生物環境保全学	地圏環境学, 水環境工学, 浅海干潟環境学, 環境地盤学, 生物環境学, 海浜環境情報学
	資源循環生産学	農業生産機械学, 生産システム情報学, 施設農業生産学, 作物生態生理学
	地域社会開発学	地域ビジネス開発学, 地域資源学, 人類生態学, 島嶼社会経済学
生命機能科学科	生命化学	生化学, 機能高分子化学, 応用微生物学
	食糧科学	生物資源利用学, 食品化学, 食糧安全学, 食品栄養化学, 活性天然物学

(出典：佐賀大学農学部平成27年度「履修の手引」)

農学部の教員は、講座内の教育研究分野(計34分野)に所属し、教育と研究を遂行している。教育研究分野の構成は各講座からの発議に基づかせることにより、教育研究に対する社会的な要請に弾力的に対応することができる。

各学科の入学定員と現員は(表1)の通りである。専任教員の教員数は(表5)のとおりで、その構成は(別添資料1)の通りであり、大学設置基準に定められた専任教員数を充足している。多様な科目を学ぶ機会を増やすために、学内の他学部教員および学外講師による授業科目を開講するとともに、「教育課程編成・実施の方針」に基づくカリキュラムとその教育を担当する教員編成の整合性を検証し、教育上主要な授業科目は専任の教授あるいは准教授が担当している(別添資料1)。

また、農学部附属アグリ創生教育研究センターの教員は、センターにおけるフィールド実習等の指導に加えて、所属学科等の教育も担当している。学内共同施設である総合分析実験センターの教員も農学部の学生に対する教育を担当している。

表5 農学部の教員数

(H27.8.1)

学科等	計	教授	准教授	講師	助教
応用生物科学科	16	8	7	1	-
生物環境科学科	17	9	7	-	1
生命機能科学科	14	6	5	2	1
アグリ創生教育研究センター(注)	7	2	3	2	-

注：アグリ創生教育研究センターの教員は、教育組織である生物環境科学科に所属

(出典：農学部資料)

1-1-2 多様な教員の確保の状況とその効果

多様な教員の確保を目的として、教員人事については公募を行っており(表6)、関係機関への通知に加えて、科学技術振興機構が運営する研究者人材データベース JREC-IN を活用した、国内外への公募情報の発信も行っている。また、男女共同参画の推進も念頭に置いた選考を行い、新たに2人の女性教員を採用した。

表6 農学部教員の公募状況

(H27.9.1)

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
応用生物科学科	3 件	1 件	2 件	2 件	2 件	-
生物環境科学科 (アグリセンター含む)	1 件	1 件	5 件	8 件	2 件	1 件
生命機能科学科	1 件	1 件	3 件	1 件	2 件	1 件
小計	5 件	3 件	10 件	11 件	6 件	2 件

(出典：農学部資料)

1-1-3 入学者選抜方法の工夫とその効果

- ① 「学位授与の方針」及び「教育課程編成・実施の方針」に対応した「入学者受け入れ方針」(資料1)を定め、これに沿って入学者選抜を行っている。この方針では「求める学生像」とともに、入学後の具体的な学習内容を例示し、それを学ぶために必要な能力や高等学校等での準備学習等について具体的に明示している。さらに、「入学者選抜の基本方針」として、入試方法ごとに、その目的、募集対象者、評価方法等を定め、各選抜方法の位置付け及び意図を明確に示すとともに、評価対象と評価方法及び入試方法区分の対応を明示した一覧表により入学志望者に分かりやすく伝えている。

資料1 農学部入学者受入れの方針(抜粋)

農 学 部
【1】求める学生像 農学部は、農学及び関連する学問領域において、多様な社会的要請にこたえうる幅広い素養と実行力を身に付けた人材を育成することを目的とします。各学科の目的と求める学生像は以下の通りです。 ■応用生物科学科 応用生物科学科では、生物の特性を理解し、生物の改良や活用を通して、社会に貢献できる人材を育成します。そのために、以下に示すような学生を求めています。 ① 多様な動植物の生理生態的特性の解明、バイオテクノロジーを用いた有用生物資源の開発・利用、有用動植物を加害する病害虫の制御等についての理解と関心がある人 ② 問題解決に向けて、粘り強く自己研鑽に努める熱意と実行力がある人 ③ 本学科で学んだことを活かして社会で活躍したいという目的意識と向上心がある人 【応用生物科学科で学ぶために必要な能力や適性等および入学志願者に求める高等学校等での学習の取り組み】 生物に対する興味があり、生物の機能また生物が生ずる環境について学習するための基礎学力として、高等学校で履修する理科や数学の基本事項を理解していることが必要です。また、講義を理解し、レポート等を作成・発表するためには、様々な文献を読み、文書を作成するという国語力が必要になるだけでなく、社会の仕組みや地理・歴史といった高等学校の教科書レベルの一般常識も求められます。さらに、専門的な知識や技術を得るためには、海外の文献にも目を通す必要があるため、高等学校の教科書レベルの英語の読解力が不可欠です。農学は、実験や調査活動を自主的にかつ継続的にこなすことが重要です。また、その課題はグローバルな問題が多くあります。従って、自然科学全般に対する知識欲と、勉強を続けるための目的意識を持つこと、さらに、教員、先輩、友人、留学生等とコミュニケーションがとれる積極性が必要です。 ■生物環境科学科 生物環境科学科では、3つのコースにおいて次のような人材を育成します。生物環境保全学コースでは、地球上の環境や生態系を深く理解し、これらの保全、再生及び活用を通して、社会に貢献できる人材を育成します。資源循環生産学コースでは、生物科学及び生産情報科学の理論と技術を学び、環境に配慮した食糧生産と環境問題の解決に貢献できる人材を育成します。地域社会開発学コースでは、フィールドワークに基づく教育研究を通して、日本を含むアジア・太平洋諸地域における、持続可能な循環型地域社会の構築に貢献できる人材を育成します。そのため、以下に示すような学生を求めています。 ① 自然環境、社会環境及び生物生産環境の保全と修復に興味を持つ人 ② 永続的な農業を可能にする新たな生物生産システム及び経済社会システムの創造に意欲があ

農学部で学ぶために必要な能力や適性等とその評価方法				
観点	入学後に必要な能力や適性等	評価方法	入試方法	
知識・理解・思考・判断	大学で学ぶために必要な汎用的な学力	大学入試センター試験において、5教科7科目の総合的な基礎学力を評価します。	一般入試（前期日程） 一般入試（後期日程）	
		調査書において、高校時代における学業成績、学習態度を評価します。	特別入試（推薦入試Ⅰ）	
		小論文によって、「問題理解力」、「文章構成力」、「論理性」、「表現力」、「知識」について評価します。	特別入試（推薦入試Ⅰ） 特別入試（帰国子女）	
		書類審査（成績証明書等）において、これまでの学習状況を評価します。	特別入試（帰国子女）	
		日本留学試験において、理系科目の成績を用いて評価します。	私費外国人留学生入試	
		口頭試問によって、志望学科で学ぶために必要な基礎的な知識とその理解力を評価します。	私費外国人留学生入試	
		日本留学試験において、日本語科目を用いて基礎的な語学力を評価します。	私費外国人留学生入試	
		TOEFLの得点を用いて、基礎的な英語力を評価します。	私費外国人留学生入試	
		大学入試センター試験において、5教科7科目の総合的な基礎学力を評価します。	一般入試（前期日程） 一般入試（後期日程）	
		個別試験において、高校で履修する「数学」について、標準的な知識と理解、数理的な解析力、それに基づく論理的思考と表現力を記述式によって評価します。また、「英語」では、長文読解力、論理的思考力等を有しているかについて記述式によって評価します。	一般入試（前期日程）	
興味・関心・態度・意欲	専門科目を学ぶために必要な基礎学力	個別試験において、高校で履修する数学について、深い知識と理解および応用力、数理的な解析力、それに基づく論理的思考と表現力について記述式によって評価します。	一般入試（後期日程）	
		小論文によって、「問題理解力」、「文章構成力」、「論理性」、「表現力」、「知識」について評価します。	特別入試（推薦入試Ⅰ） 特別入試（帰国子女） 特別入試（推薦入試Ⅰ）	
		口頭試問によって、志望学科で学ぶために必要な基礎的な知識とその理解力を評価します。	特別入試（帰国子女） 私費外国人留学生入試	
		学力検査において、英語文章の読解力について評価します。	3年次編入学試験（一般入試）	
		書類審査（成績証明書等）において、これまでの学習状況を評価します。	3年次編入学試験（一般入試）	
		調査書において、高校時代における課外活動や志望学科での学習に関連する実績等を評価します。	特別入試（推薦入試Ⅰ）	
		推薦書において、推薦の理由を参考にします。	特別入試（推薦入試Ⅰ）	
		面接試験において、志望学科で学ぶ動機、意欲、積極性、一般的態度等を評価します。	特別入試（帰国子女） 私費外国人留学生入試	
			3年次編入学試験（一般入試）	
	志望学科で学ぶための明確な志望動機や入学後の学習意欲			

（出典：農学部資料）

- ② 入学者の入学後の状況については、アドミッションセンターで独自開発した入学者追跡システムを用いて分析し、継続的に入学者選抜方法の効果を検証している。
- ③ 入学希望者に対しては、一般の大学入試センター試験及び前期日程又は後期日程並びに個別学力試験による選抜に加えて、推薦入試、帰国子女入試、私費外国人留学生入試及び3年次編入学入試を実施しており、多様な受験生のニーズに対応する入試システムを提供している（表7）。

表7 各入試の募集定員

	一般入試		特別入試		私費外国人留学生入試	3年次編入学入試
	前期日程	後期日程	推薦	帰国子女		
応用生物科学科	25人	10人	10人	若干人	若干人	10人
生物環境科学科	30人	15人	15人			
生命機能科学科	30人	5人	5人			
小計	85人	30人	30人	若干人	若干人	10人

（出典：農学部資料）

④平成 22 年度から 27 年度の学科別の志願者倍率は、3.3 倍から 7.6 倍である（表 8）。

表 8 農学部の志願者倍率

学科（入学定員）	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
応用生物科学科 （45 人）	6.6	4.6	4.6	5.2	4.6	3.7
生物環境科学科 （60 人）	4.7	3.3	3.9	3.4	5.0	4.1
生命機能科学科 （40 人）	6.8	5.6	7.6	7.1	5.1	5.2

備考：農学部の入学定員は 145 人である。（出典：アドミッションセンター入試統計資料）

1-1-4 教員の教育力向上や職員の専門性向上のための体制の整備とその効果

- ① 個々の教員が教育活動を振り返り、その証左を示す過程を通して教育改善に導くティーチング・ポートフォリオの作成を、ワークショップ等を通じて推進し、平成 27 年度末の段階で 100%の教員（簡易版 55 人，標準版 6 人）が作成した。
- ② 農学部の教育課程の編成や教育方法等の改善に係わる重要事項は、各学科・教育コースから選出された教員で構成する農学部教育委員会で審議され、具体的な方策等が学科会議やコース会議で周知されている。ファカルティ・ディベロップメント（以下、FD と略す。）の立案も教育委員会内に設置されている FD 専門委員会が担当し、以下のように FD を実施し、教員の教育改善に効果を上げている（表 8）。

表 9 農学部主催の FD 講演会・研修会の実施状況

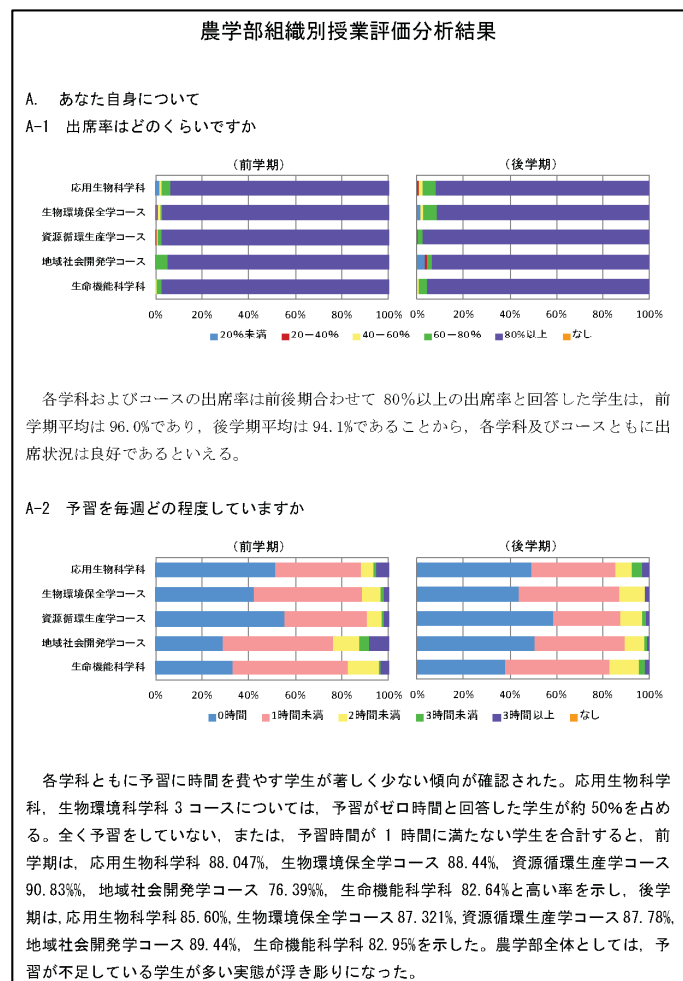
開催年度	開催日	講演題目	講演者
23	7/6	ティーチングポートフォリオについて	滝澤ポートフォリオ専門委員長
23	7/20	TA 研修会	鹿児島大学大学院連合農学研究科が主催 小林恒夫・長 裕幸・光富 勝連大代議員
23	10/19	ハラスメント～思いやりのない行動～	佐藤 武 教授（佐賀大学保健管理センター長）
23	11/19	最近の大学生をどう理解し、対応するか	安田 郁 氏（佐賀大学保健管理センター・カウンセラー）
24	8/10	TA 研修会	鹿児島大学大学院連合農学研究科主催 長 裕幸（農学部生物環境科学科・教授・連大代議員）
24	9/5	佐賀大学の EA21 活動の現状と課題	佐賀大学 EA21 委員
24	11/19	最近の大学生をどう理解し、対応するか	安田 郁カウンセラー（佐賀大学保健管理センター）
24	1/25	卒論・修論教育などストレス時の学生への対応及びストレス解消法	山内一祥助教（全学教育機構特任助教）
25	6/12	佐賀大学の EA21 活動の現状及び農学部における節電対策について	農学部 安全衛生委員会 EA21 担当 近藤文義
25	7/3	TA 研修会	鹿児島大学大学院連合農学研究科が主催 稲岡 司・野間口真太郎・石丸幹二 連大代議員

25	1/22	この時期，学生をどのように支援し，研究の進展を促すか ～ その取組方法について	山内一祥 全学教育機構 高等教育開発室
26	1/14	初等教育へのeラーニング教材導入について	eラーニングスタジオ 久家淳子氏，穂屋下先生
26	1/22	この時期，学生をどのように支援し，研究の進展を促すか，その取組方法について	全学教育機構 高等教育開発室 山内一祥 (農学部男女共同参画推進委員主催)
26	7/16	T A 研修会	主催 鈴木彰宏・野間口眞太郎・石丸幹二 連大代議員
27	9/9	佐賀大学における障害学生支援の現状と課題	中島 俊思 講師(佐賀大学学生支援室)
27	3/4	キャリアセンターの就職活動支援状況と学生への進路指導	森田 佐知子 准教授(佐賀大学キャリアセンター)

(出典：農学部資料)

- ③「学生による授業評価アンケート」は継続的に実施しており，実験，実習等を含む全科目で授業評価を実施している。各教員は，授業評価の結果に基づいて授業内容を点検し，その結果をオンラインで公開している。学部開催のFD講演会を開催するとともに，授業評価の報告書を教員へ周知することにより，授業内容の改善・更新に役立てている(資料2)。

資料2 農学部・農学研究科授業評価報告書 抜粋



(出典：農学部資料)

1-1-5 教育プログラムの質保証・質向上のための工夫とその効果

- ① 「学士課程における教育の質保証に関する方針」及び「学士課程における教育の質保証の推進に係るガイドライン」に基づき、教育の質保証体制の整備と教育プログラムの検証を行っている。
- ② 「シラバス作成の手引き」を定め、学習の成果を測定可能な表現により記載した到達目標、準備学習など自主的学習を促す指示や課題等の記載、到達目標に対応した成績評価の方法と基準の記載など、授業科目の質を担保するシラバスを作成している(資料3)。

資料3 シラバスの一例

LiveCampus
Academic Affairs System

メニュー
ログアウト

シラバス関連 > シラバス参照 > シラバス検索 > シラバス一覧 > シラバス参照

Login User 穴井 豊昭

タイムアウトまでおよそ 1800秒です。
印刷

シラバス参照

タイトル「2016年度」、フォルダ「全学教育機構-大学入門科目」
シラバスの詳細は以下となります。

戻る
参照URL
Excel出力

医学部のシラバスは [こちらから。](#)
医学系研究科のシラバスは [こちらから。](#)

開講年度	2016	開講時期	前期
コースナンバー	1-010x000		
科目コード	G1110001		
科目名	大学入門科目 I		
担当教員(所属)			
単位数	2		
曜日・校時	月 5		
学士力番号	2-(1)、2-(2)、2-(3)		
講義形式	講義とガイダンス、並びに学生による話題提供または課題発表と討論		
講義概要	大学生活を始めるに当たり必要なガイダンス（カリキュラム、学生生活、就職状況、図書館利用などについて）を行う。 また、学生に大学での自主的かつ積極的な学習態度を身につけさせるため、学生各自に与えた課題に対する情報収集や調査を行わせ、これについてのプレゼンテーションを行わせる。		
開講意図	適切な大学生活を送ることができるようになる。		
到達目標	学生は、旺盛な好奇心を育む為に、自ら積極的に学習する姿勢を身に付けることを目標とする。 学生は、図書館の基本的な利用の仕方の方法を身に付ける。 学生は、教育委員会、学生委員会、メンタルヘルス、エコアクション21環境教育、チューター、ハラスメント等の講義を受け、大学生の基本的な生活の方法を身に付ける。 学生は、研究室訪問調査を行い、基本的な情報解析・プレゼンテーションの方法を身に付ける。 学生は、キャリア教育の基本も身に付ける。		
聴講指定	応用生物科学科1年生		
履修上の注意	必須科目であるため、応用生物科学科の学生は全員受講すること。		
授業計画	応用生物科学科1年生を4組に分け、各組（約12名）をそれぞれ1名の教員が担当する。 また、各種ガイダンスは関連委員が担当する。 毎回、講義内容を整理し、次回に備えておくこと。 授業計画：基本的に下記のようなスケジュールで講義を進めることを予定している。 1) 教育委員からの教務ガイダンス1（内容を復習しておくこと） 2) 学生委員からの生活ガイダンス（内容を復習しておくこと） 3) 保健管理センター教員によるメンタルヘルス講習会（内容を復習しておくこと） 4) エコアクション21委員会教員によるエコアクション21環境教育（内容を復習しておくこと） 5) チューター（穴井、大島、野間口、藤田）からのガイダンス（内容を復習しておくこと） 6) ハラスメント委員会委員によるハラスメント講習会（内容を復習しておくこと） 7) 情報リテラシー講義（内容を復習しておくこと） 8) 図書館スタッフによる図書館利用指導（内容を復習しておくこと） 9) 各研究室訪問調査、各グループでの討論（調査内容をまとめる） 10) 各グループの発表1 11) 各グループの発表2（レポートを作成する） 12) 国民年金の説明 13) キャリアデザイン入門（内容を復習しておくこと） 14) 卒業生によるキャリア教育（内容を復習しておくこと） 15) 教育委員からの教務ガイダンス2		

(出典：農学部資料)

- ③ 単位制度の実質化に向けた履修登録の上限設定（C A P 制度）を導入し、学習時間の確保を行うとともに、G P A が一定基準を越える成績優秀者に対しては、C A P 制度を緩和して学習の発展に配慮している。
- ④ 各授業科目における学生の成績評価（G P A）の分布を指標として、成績評価の適切性の検証を教育委員会で組織的に行うことにより、教育の質・効果の質保証を担保している。
- ⑤ ラーニング・ポートフォリオに、履修科目のG P Aやレーザチャートとして表示した学士力の到達状況を表示し、学習成果を可視化して判断できるように工夫をしており、これを活用したチューターによる個別学習指導を行い、学習の質の向上を図っている。
- ⑥ また、このラーニング・ポートフォリオによる学習成果判断機能を、「卒業時の学習成果を総合的に判断する仕組み」として活用して学習成果の質を保証している。
- ⑦ 講義室および実験室の映像教材利用環境を整備し、学生の授業理解の向上に役立つ液晶プロジェクターや電子黒板などの利用を容易にした。

（水準）

教育の実施体制は、期待される水準を上回る。

（判断理由）

- 1. 農学部の理念・目的を達成するための学科構成と教員配置は適切である。
- 2. 学位授与の方針に基づき、効果的な教育プログラムが組まれている。
- 3. 教育研究分野を柔軟に変更できるシステムを持ち、教育環境の変化に対応できる。
- 4. 教育の充実に必要な学科と附属センター等との連携が密である。
- 5. 学生による授業評価の実施体制が整備され、実行されている。
- 6. 教育の質保証・質向上のため学生の授業評価に基づいて授業点検・評価を行い、シラバスの改善がなされている。

観点 1-2 教育内容・方法

（観点に係る状況）

1-2-1 体系的な教育課程の編成状況

- ① 農学部では、「佐賀大学学士力」の修得を担保するために「学位授与の方針」（資料 4）と「教育課程編成・実施の方針」（資料 5）を定め、これに基づいて学科・コースごとに、教養教育科目と専門教育科目を有機的かつ体系的に配置した教育課程の編成をおこなっている。

資料４ 農学部「学位授与の方針」（抜粋）

佐賀大学農学部 学位授与の方針

学部らなびに各学科の目的を実現するために、佐賀大学学士力を踏まえ、学生が身に付けるべき以下の具体的学習成果の達成を学位授与の方針とする。また、学則に定める卒業の認定の要件を満たした者には、教授会の議を経て、学長が卒業を認定し、学位記を授与する。

応用生物科学科

１．基礎的な知識と技能

- (1) 文化と自然などに関する授業科目を有機的に関連付けて履修・修得し、文化的素養を身に付けている。
- (2) 健全な社会や健康な生活に関する種々の授業科目を履修・修得し、生活の質の向上に役立てることができる。
- (3) 言語・情報・科学リテラシーに関する授業科目を履修・修得し、日本語と英語を用いたコミュニケーション・スキルを身に付け、情報通信技術（ＩＣＴ）などを用いて、多様な情報を収集・分析し、科学的合理性や科学的論理に基づいて判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- (4) 微生物から植物や動物など、農学分野で扱う生物の基礎的な知識・技術を体系的に修得し、農学に関わる業務を遂行する職業人としての必要な実践能力を有する。

２．課題発見・解決能力

- (1) 実践演習型学習や問題解決型学習を通して現代的な諸問題に関心・理解を持ち、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、科学的・論理的な思考に基づいて、その問題の解決に取り組むことができる。
- (2) 微生物から植物や動物など、農学分野で扱う生物に関して深い学識や基礎的技術を持ち、課題の発見や解決に向けての思考力および行動力を身に付けている。
- (3) 演習や卒業研究などを通して人間理解に立った良い人間関係の形成、研究チームの一員としての協調・協働した行動、リーダーシップを発揮する率先した行動、後輩等に対する指導力などを身に付け、実践できる。

３．個人と社会の持続的発展を支える力

- (1) 文化や伝統などの違いを踏まえて、平和な社会実現のために他者の立場で物事を考え、自然環境や社会的弱者に配慮することができる。
- (2) 問題解決型学習などを通して自己学習の習慣を身に付け、自己の生き方を考察し、主体的に社会的役割を選択・決定し、生涯学習を行う意欲と態度を有する。
- (3) ４年間の教育課程を通して高い倫理観と豊かな人間性を育み、社会生活で守るべき規範を順守し、自己の能力を社会の健全な発展に寄与しうる姿勢を身に付けている。

生物環境科学科

１．基礎的な知識と技能

- (1) 文化と自然などに関する授業科目を有機的に関連付けて履修・修得し、文化的素養を身に付けている。
- (2) 健全な社会や健康な生活に関する種々の授業科目を履修・修得し、生活の質の向上に役立てることができる。
- (3) 言語・情報・科学リテラシーに関する授業科目を履修・修得し、日本語と英語を用いたコミュニケーション・スキルを身に付け、情報通信技術（ＩＣＴ）などを用いて、多様な情報を収集・分析し、科学的合理性や科学的論理に基づいて判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- (4) 農学分野（環境保全と持続的食糧生産）の基礎的な知識・技術を体系的に修得し、農学に関わる業務を遂行する職業人としての必要な実践能力を有する。

（出典：農学部資料）

資料 5 農学部「教育課程編成・実施の方針」（抜粋）

佐賀大学農学部 学位授与の方針

学部らなびに各学科の目的を実現するために、佐賀大学学士力を踏まえ、学生が身に付けるべき以下の具体的学習成果の達成を学位授与の方針とする。また、学則に定める卒業の認定の要件を満たした者には、教授会の議を経て、学長が卒業を認定し、学位記を授与する。

応用生物科学科

1. 基礎的な知識と技能

- (1) 文化と自然などに関する授業科目を有機的に関連付けて履修・修得し、文化的素養を身に付けている。
- (2) 健全な社会や健康な生活に関する種々の授業科目を履修・修得し、生活の質の向上に役立てることができる。
- (3) 言語・情報・科学リテラシーに関する授業科目を履修・修得し、日本語と英語を用いたコミュニケーション・スキルを身に付け、情報通信技術（ICT）などを用いて、多様な情報を収集・分析し、科学的合理性や科学的論理に基づいて判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- (4) 微生物から植物や動物など、農学分野で扱う生物の基礎的な知識・技術を体系的に修得し、農学に関わる業務を遂行する職業人としての必要な実践能力を有する。

2. 課題発見・解決能力

- (1) 実践演習型学習や問題解決型学習を通して現代的な諸問題に関心・理解を持ち、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、科学的・論理的な思考に基づいて、その問題の解決に取り組むことができる。
- (2) 微生物から植物や動物など、農学分野で扱う生物に関して深い学識や基礎的技術を持ち、課題の発見や解決に向けての思考力および行動力を身に付けている。
- (3) 演習や卒業研究などを通して人間理解に立った良い人間関係の形成、研究チームの一員としての協調・協働した行動、リーダーシップを発揮する率先した行動、後輩等に対する指導力などを身に付け、実践できる。

3. 個人と社会の持続的発展を支える力

- (1) 文化や伝統などの違いを踏まえて、平和な社会実現のために他者の立場で物事を考え、自然環境や社会的弱者に配慮することができる。
- (2) 問題解決型学習などを通して自己学習の習慣を身に付け、自己の生き方を考察し、主体的に社会的役割を選択・決定し、生涯学習を行う意欲と態度を有する。
- (3) 4年間の教育課程を通して高い倫理観と豊かな人間性を育み、社会生活で守るべき規範を順守し、自己の能力を社会の健全な発展に寄与しうる姿勢を身に付けている。

生物環境科学科

1. 基礎的な知識と技能

- (1) 文化と自然などに関する授業科目を有機的に関連付けて履修・修得し、文化的素養を身に付けている。
- (2) 健全な社会や健康な生活に関する種々の授業科目を履修・修得し、生活の質の向上に役立てることができる。
- (3) 言語・情報・科学リテラシーに関する授業科目を履修・修得し、日本語と英語を用いたコミュニケーション・スキルを身に付け、情報通信技術（ICT）などを用いて、多様な情報を収集・分析し、科学的合理性や科学的論理に基づいて判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- (4) 農学分野（環境保全と持続的食糧生産）の基礎的な知識・技術を体系的に修得し、農学に関わる業務を遂行する職業人としての必要な実践能力を有する。

（出典：農学部資料）

- ② 教養教育は、高校と大学との接続を図る大学入門科目、高度技術社会の中で求められる語学、健康・スポーツ科学及び情報リテラシーの技能を習得する共通基礎科目、市民社会の一員としての素養を身に着ける基本教養科目、大学と社会との接続を目的としたインターフェース科目からなる新しい体系的教養教育カリキュラムを全学教育機構で提供している。
- ③ 「佐賀大学学士力」、「学位授与の方針」及び「教育課程編成・実施の方針」のクロスチェック表を用いて、カリキュラムの体系性と順次性を検証し、それぞれの学科・コースごとに定める「学位授与の方針」を具現化するために、効果的な学習を実現するための標準履修モデルを示している（資料 6）。さらに、学生が個々の科目の関連性についての理解を補助し、学習効果を向上させることを狙った学科ごとのカリキュラムマップの提供も行っている（資料 7）。
- ④ 数学、物理学、化学、生物学を学習させる専門基礎科目は、1 年前期に配置することにより、理数系科目の基礎学力を向上させ、専門教育への円滑な移行を進めている。学力差が大きい数学では、学力別クラスを編成している。
- ⑤ 農学部の中核的な授業科目（コア科目）として、1 年次及び 2 年次の学生向けに、農学基礎科目（5 科目）を開講している（3 科目が選択必修）。そのほかの必修科目は、各学科、コースの特徴を生かせるよう配置している。

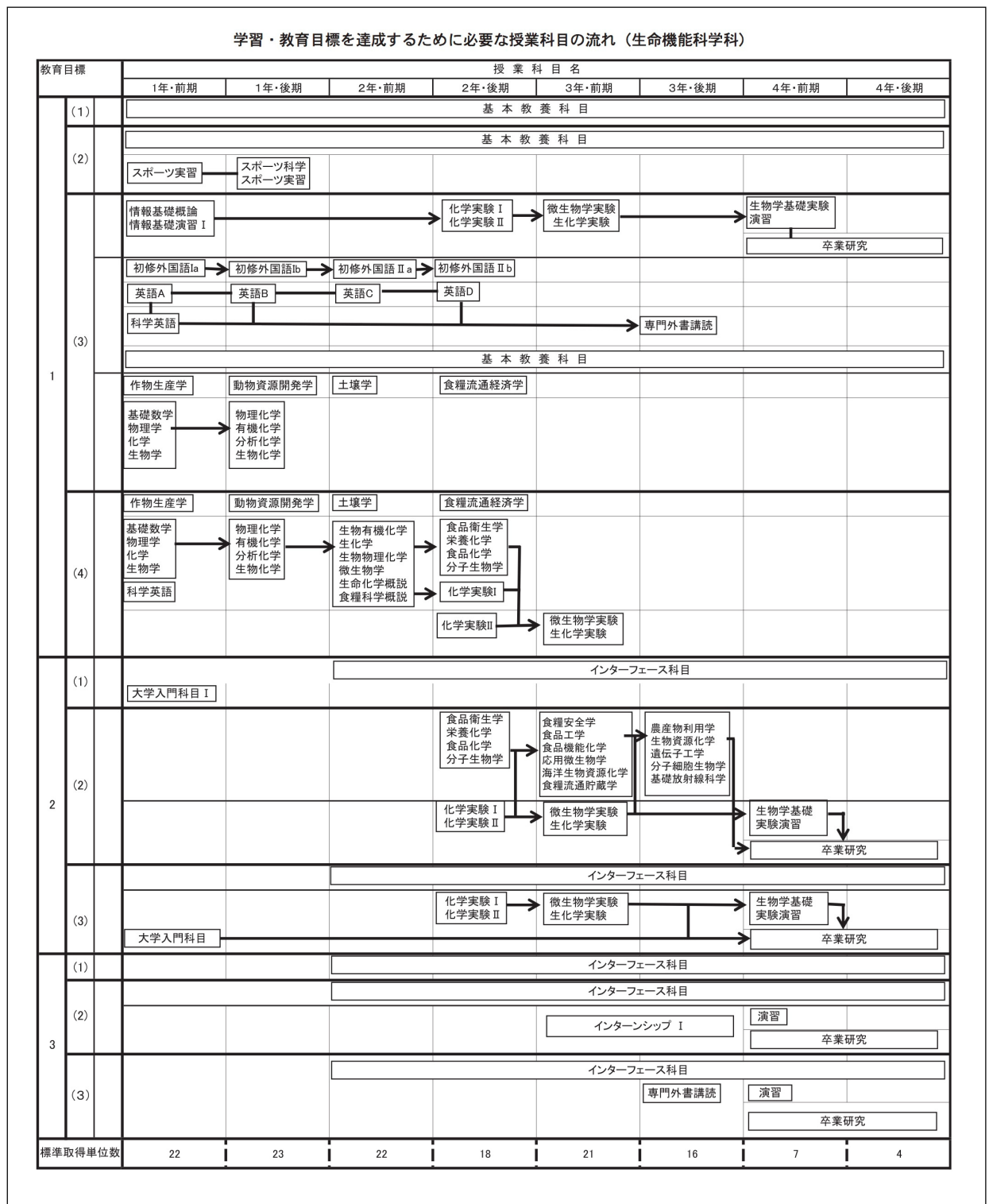
資料 6 履修モデルの一例

応用生物科学科 標準履修モデル

	専門基礎科目 (化学および 生物必修)	農学基礎科目 (3科目 選択必修)	専 門 科 目 (必 修)	専 門 科 目 (選 択)	教 養 教 育 科 目	単位数
4 年後期			卒業研究			4 単位～ 6 単位 (卒業研究を 1/2とする)
4 年前期			卒業研究	植物栄養学 飼料資源学 (or動物生体生理学)		4 単位～ 8 単位 (卒業研究を 1/2とする)
3 年後期			生物科学英語 生物情報処理演習	食用作物学 農業政策論 経営資源管理学 熱帯有用植物学 分野実験Ⅱ	インターフェース科目	15単位～ 20単位
3 年前期			科学英語	植物分子遺伝学 植物生態生理学 動物遺伝育種学 動物生体生理学 (or飼料資源学) 動物生産管理学 分野実験Ⅰ	基本教養科目(1科目) インターフェース科目	19単位～ 22単位
2 年後期		食料流通経済学	果樹園芸学 応用生物学実験 応用化学実験 蔬菜園芸学	植物病原学 昆虫学 動物繁殖生理学 フィールド科学基礎実習Ⅱ	基本教養科目(1科目) 英語 英語以外の外国語 インターフェース科目	20単位～ 22単位
2 年前期		土壌学	植物病理学Ⅰ 生物学実験 植物育種学 フィールド科学基礎実習Ⅰ	熱帯作物改良学 線虫学 動物行動生態学 システム生態学 花卉園芸学	基本教養科目(1科目) 英語 英語以外の外国語 インターフェース科目	20単位～ 22単位
1 年後期		動物資源開発学 生物化学	応用動物昆虫学 植物生理学 生物統計学 熱帯農業論 遺伝学		基本教養科目(2科目) 英語 英語以外の外国語 スポーツ実習 健康・スポーツ講義	21単位～ 23単位
1 年前期	基礎数学 物理学 化学 生物学	作物生産学			大学入門科目 基本教養科目(1科目) 情報基礎概論 情報基礎演習Ⅰ 英語 英語以外の外国語 スポーツ実習	20単位～ 22単位
卒業要件 単 位	4(2科目)	6(3科目)	36(17科目)	43(23科目)	37	126

(出典：農学部資料)

資料 7 カリキュラムマップの一例



(出典：農学部資料)

1-2-2 社会のニーズに対応した教育課程の編成・実施上の工夫

- ①教育課程の編成・実施上の基本となる、佐賀大学学士力は、定期的に見直され社会のニーズに適応したものにされる。
- ②教養教育で開催されるインターフェースプログラムは、社会のニーズに適応するために、プログラムの随時見直しており、学生と社会を直接つなぐ体系的なプログラムとなっている。
- ③専門教育においては、3年次生におけるインターンシップ制度の充実を図り、学生が社

会参加を経験することにより、4年次生における卒業研究へのフィードバックを目指している。

表 10 インターンシップ等による単位取得者数

区 分	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年 度
インターンシップ	28	23	18	33	28	41
単位互換制度に基づく 科目履修	9	2	0	3	3	6
科目等履修生	2	1	1	1	3	2

(出典：教務情報システム成績管理データ)

- ④ 学生に対して求められる社会のニーズを意識させ、卒業後の進路を見据えた学習の効果を高めることを目的として、OB・OGなどの講話を通してキャリア教育を実施している(表 11)。

表 11 H27 年度の農学部就職ガイダンス講座・講演実施実績

開催日	講座・講演題目
4/24	就職活動スタート講座
6/5	自分に合う就職先を考える講座
7/15	ビジネスマナーとインターンシップ事前講座
7/17	キャリア講演会：「発見」が世界を美しく豊かに変えていく
10/21	4年生内定者インタビュー、インターンシップ事後講座
11/18	企業で活躍するOB・OGを呼んでの座談会とグループディスカッション
12/16	履歴書・ES 講座
1/6	面接講座①
2/3	面接講座②

(出典：農学部資料)

- ⑤ 「地域再生・活性化の核となる大学の形成」を目指した「地（知）の拠点整備事業（大学COO事業）」の一環として、「コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト」に参画し、農学部附属アグリ創生教育研究センターを中心として、「アグリ資源の多様性を活用したアグリ医療及び機能性食品の開発プロジェクト」を実施している(資料 8)。

資料 8 「コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト」ホームページ



(出典：農学部資料)

1-2-3 国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫

- ① 学生に明確な学習目標を与えることで自律的かつ持続的学習を促し、英語のできるグローバル人材の育成という社会からの要請にこたえるため、平成 25 年度入学生より全ての学生に対して 2 回の学外語学試験（TOEIC）の受験を義務づけており、入学時の英語能力に合わせたクラス編成と学習成績への反映を行っている。この結果、平成 25 年度および平成 26 年度入学者の TOEIC の平均点は学部全体として上昇しており、効果が確認された（表 12）。

表 12 平成 25 年度および平成 26 年度入学者の TOEIC の学年別平均点の推移

学科等	平均点（2 回目）	平均点（1 回目）	差分
H25 年度入学者	442.6	433.1	9.5
応用生物科学科	426.6	415.3	11.3
生物環境科学科	426.9	402.7	24.2
生命機能科学科	482.0	498.7	△16.7
H26 年度入学者	452.7	440.8	11.9
応用生物科学科	449.7	427.7	22.0
生物環境科学科	452.7	439.9	12.8
生命機能科学科	456.2	457.9	△1.7

(出典：農学部資料)

- ②農学部ではSPACE (Saga University Program for Academic Exchange)プログラムなどを活用して、海外からの特別聴講学生の受け入れを行っているほか(表 13)、学部学生に対する海外提携校への留学支援にも注力しており(表 14)、国際通用性を有する人材の育成に役立っている。

表 13 SPACEプログラムによる留学生の受け入れ実績

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
SPACE-E	3	5	3	6	4	5
SPACE-J	1	0	2	0	0	0
計	4	5	4	7	4	5

(SPACE-Eは英語, SPACE-Jは日本語によるプログラム)

(出典：農学部資料)

表 14 海外提携校への学部学生派遣実績

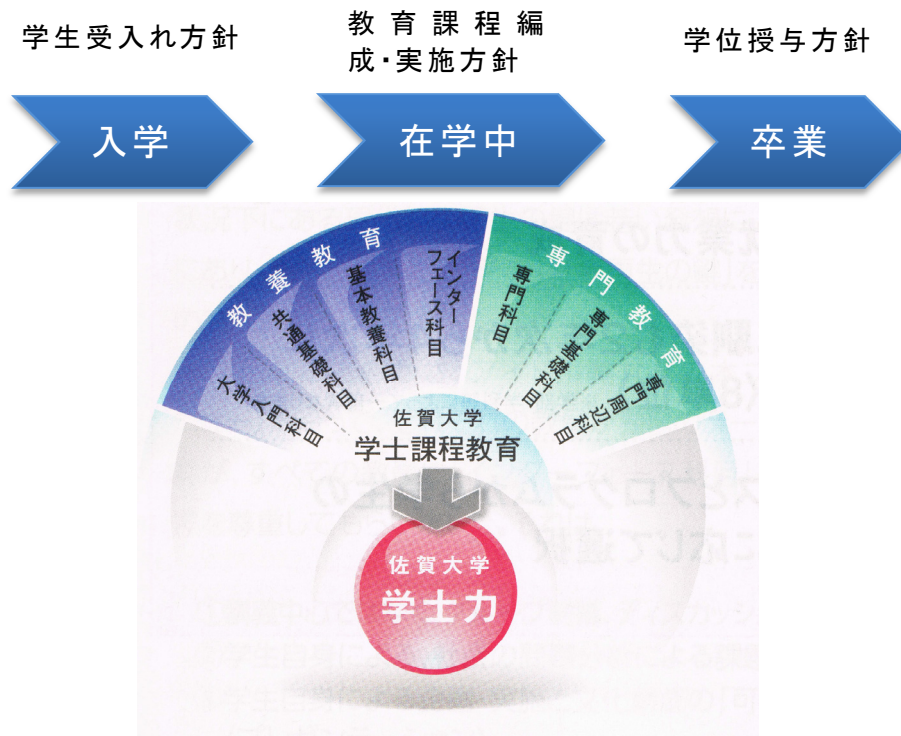
	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
派遣人数	2	13	21	17	36	39

(出典：農学部資料)

1-2-4 養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

農学部では、卒業時まで「佐賀大学学士力」を身につけた人材を養成することを担保するため、「入学者受入れの方針」、「学位授与の方針」、「教育課程編成・実施の方針」を整備した(資料 9)。また、各学科において養成しようとする人材像に応じて、実験・実習プログラムを充実させた実践的な「履修モデル」を作成し、学生に、それぞれの科目の関係を明確にした「カリキュラムマップ」を示すことで、教育効果を高めている。

資料 9 人材育成のための教育方法

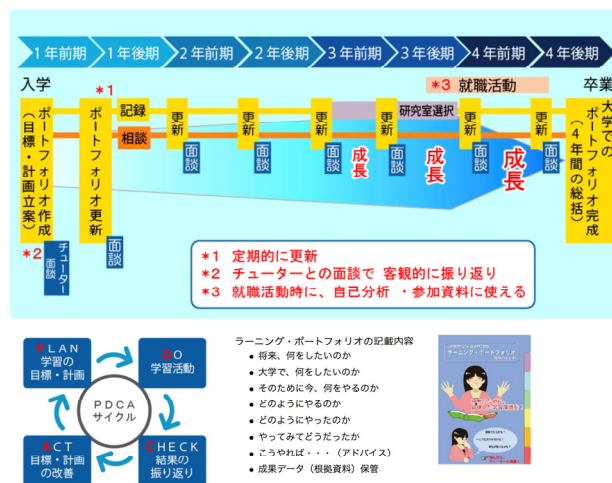


(出典：佐賀大学案内 2015 から抜粋)

1-2-5 学生の主体的な学習を促すための取組

- ① ラーニング・ポートフォリオを平成 23 年度入学者から導入し、学生自身が学習活動を記録し、自己点検評価を行い、学習活動の改善に努めることにより、学生の学習意識の向上を図っている。
- ② さらに、ラーニング・ポートフォリオ活用して、チューターが学生の学習状況に応じた学習指導を行うことにより、学生の主体的な学習を促している（資料 10）。

資料 10 ラーニングポートフォリオの活用イメージ



(出典：農学部資料)

- ③ 自学自習スペースの確保のため、農学部南棟と北棟および4号館3階にコミュニケーションスペースを設けた。また、共通実験実習室および小規模講義室に電子黒板と端末機器用のソフトウェアを整備した。

(水準)

教育内容・方法は、期待される水準にある。

(判断理由)

1. 教養教育と専門教育が適切に配置されている。
2. 学科横断的な農学基礎科目の設置等、総合科学である農学の特性に合うカリキュラムを構築している。
3. 他学部教員等が開講する科目の履修を薦め、自由科目として単位を認定している。
4. 各学科の教育目的を達成するための必修科目が適切に配置されている。
5. 編入学生や留学生を積極的に受け入れる体制を構築している。
6. 海外の提携校への留学支援を進めている。
7. 地域社会の要望に応える地域貢献授業が充実している。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 2-1 学業の成果

(観点に係る状況)

2-1-1 履修・修了状況から判断される学習成果の状況

学生に対する教育の成果・効果を示す単位取得状況は、(表 15) の通りである。

表 15 修得総単位数の平均値の推移

学科	入学年度(学年)					
	平成 19	平成 20	平成 21	平成 22	平成 23	平成 24
応用生物科学科	130.4	132.7	134.5	128.0	129.4	129.6
生物環境科学科	134.0	133.6	133.9	132.1	127.7	130.4
生命機能科学科	129.8	131.8	132.5	125.4	125.8	130.5

備考：総単位数は、修業年限 4 年の学部学生が修得した科目の合計単位数を示す

(出典：教務情報システム成績管理データ)

農学部は、学年ごとの進級判定は行っていないが、教育の質を保証するために、農学教育の要である卒業研究を開始する際に、卒業研究履修認定を実施している。履修が認定されない場合は、留年となる。学生に対する教育の効果・成果は、卒業時までの総合成績として計られる。

平成 22 年度から 27 年度の 3 月時点における全在籍者数に対する卒業者の割合(卒業率)は、(表 16) の通りである。卒業率は、留年生を除いた 4 年次生に限ると、やや高くなる。

表 16 年度別の卒業率の推移

年度	学科	在籍学生数(4 年生)		卒業者数	卒業率(%)	
		総数 (留年含む)	4 年生		総数に対する割合	4 年生に対する割合
平成 22 年度	応用生物科学科	58	53	46	79.3	86.8
	生物環境科学科	75	64	67	89.3	104.7
	生命機能科学科	51	46	47	92.2	102.2
	合 計	184	163	160	86.9	98.1
平成 23 年度	応用生物科学科	61	50	49	80.3	98.0
	生物環境科学科	84	78	68	81.0	87.2
	生命機能科学科	51	47	48	94.1	102.1
	合 計	196	175	165	84.1	94.2
平成 24 年度	応用生物科学科	60	49	42	70.0	85.7
	生物環境科学科	77	66	63	81.8	95.5
	生命機能科学科	49	46	48	98.0	104.3
	合 計	186	161	153	82.2	95.0
平成 25 年度	応用生物科学科	64	51	52	81.3	102.0
	生物環境科学科	78	66	65	83.3	98.5
	生命機能科学科	43	42	39	90.7	92.9
	合 計	185	159	156	84.3	98.1
平成 26 年度	応用生物科学科	62	51	49	79.0	96.1
	生物環境科学科	78	67	68	87.2	101.5
	生命機能科学科	47	43	44	93.6	102.3
	合 計	187	161	161	86.0	100.0
平成 27 年度	応用生物科学科	59	52	47	79.7	90.4
	生物環境科学科	72	65	64	88.9	98.5
	生命機能科学科	46	43	40	87.0	93.0
	合 計	177	160	151	85.3	94.3

(出典：教務情報システム学籍管理データ)

過去6年間の学生の資格取得状況は、ほぼ同数程度の状態を維持しており、十分な教育効果を保っている。(表17)

表17 年度別の各種資格取得者数及び申請有資格者数の推移

資格の種類	入学年度						備考
	平成19	平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	
教職免許	7	10	8	11	7	7	高校農業，高校理科，中学理科の免許取得者の合計数
農業改良普及員	151	157	141	156	150	145	農学部卒業生を示し，卒業後に4年以上の実務経験を経て，農業改良普及員の受験資格を得る。
測量士補・測量士	20	23	17	18	15	8	所定の単位取得者数
土木施工管理技士	4	2	1	8	3	2	所定の単位取得者数
食品衛生管理者	44	44	45	39	41	40	食品衛生コースの科目履修者数
食品衛生監視員	44	44	45	39	41	40	食品衛生コースの科目履修者数

(出典：教務情報システム履修管理データ及び教務情報システム成績管理データ)

学業成績優秀者を対象とする農学部長表彰者は各年度3人である(各学科から1人)。

2-1-3 学業の成果の達成度や満足度に関する学生アンケート等の調査・分析結果

授業に対する満足度を測るための「学生による授業評価」を継続的に実施しており，この評価結果を参考にして，次年度の授業改善目標を「授業点検・評価報告書」として教員が提出するようにしたことにより，授業改善が進んだ。

(水準)

学業の成果は、期待される水準にある。

(判断理由)

- ①「秀」および「優」の評価を受けた学生は過半数を超えており、学生が授業内容を理解していると考えられる（表 18）。
- ②過去 6 年の卒業率は、卒業研究履修認定を保留された学生を除くと 97% 以上、認定保留者を含めると 85% 以上である。
- ③「学生による授業評価」において、おおむね良好な評価を得ている。
- ④授業評価の結果の利用等を通じて授業改善が進み、授業科目に対する学生の満足度は年々高まっている（表 19）。

表 18 秀および優評価の取得率の推移

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
秀	27.7	30.1	28.7	29.1	28.9	28.9
優	30.3	30.5	30.1	28.9	28.8	29.4

（出典：教務情報システム履修管理データ及び教務情報システム成績管理データ）

表 19 授業科目に対する学生の満足度の推移

学科・コース	H22 前期	H22 後期	H23 前期	H23 後期	H24 前期	H24 後期	H25 前期	H25 後期	H26 前期	H26 後期	H27 前期	H27 後期
応用生物科学科	58.3	55.6	63.9	52.8	66.3	65.4	75.9	68.5	68.5	68.5	82.9	77.5
生物環境保全コース	46.9	60.4	42.6	66.7	49.6	72.2	79.6	76.5	61.5	81.5	67.6	81.1
資源循環生産学コース	68.5	74.1	64.8	74.1	65.7	74.1	65.2	78.7	78.9	80.2	85.2	90.0
地域社会開発学コース	64.8	55.6	71.3	53.7	88.5	55.6	67.2	64.8	89.6	57.8	74.7	77.1
生命機能科学科	58.5	61.1	60.2	67.6	59.3	75.9	67.2	75.2	64.1	74.1	75.9	79.0
学部平均	59.4	61.3	60.6	63.0	65.9	68.6	71.0	72.7	72.5	72.4	79.3	80.1

（出典：学生による授業評価アンケート結果より）

観点Ⅱ-2 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

2-2-1 進路就職状況

農学部では、早期に学生が卒業後の進路についての明確なビジョンを形成し、在学中の修学効果を高めることを目的として、LPの作成や1年前期に大学入門科目を開講しているほか、3年次には実際に企業や公的機関で一時的に就業を経験させるインターンシップ科目等を開設して、学生のキャリア形成を支援してきたが、近年インターンシップ参加者数は増加傾向にあり、学生の進路決定について一定の効果を上げていると考えられる(表19)。

表 20 インターンシップ参加者数

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
農学部 全体	28	23	18	32	28	41
応用生物科学科	12	9	11	11	8	12
生物環境科学科	13	7	4	20	18	29
生命機能科学科	3	7	3	2	2	0

(出典：農学部資料)

加えて、各学科に就職担当教員を置き、農学部OBの就職講演会等も開催し、学生の就職活動のバックアップを行うことで、就職率の向上を図っている(表20)。その結果、農学部の就職率は安定して高く、民間企業はもとより、公務員を希望する者も比較的多いことから、農学部の教育目的は達成されており、教育効果も上がっている。また、大学院にも毎年約25%程度の者が進学している。

また、卒業生の就職率も年度によって多少の変動はあるものの、概ね良好な状態を保っており、在学中に十分な教育効果があがっているものと考えられる。

表 21 農学部卒業生の就職率

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
農学部 全体	97.8	95.5	98.0	99.0	98.1	95.7
応用生物科学科	100.0	100.0	100.0	97.3	100.0	96.8
生物環境科学科	97.7	95.2	100.0	100.0	97.9	92.5
生命機能科学科	95.8	91.4	94.1	100.0	96.6	95.4

(出典：農学部資料)

卒業生の主な就職先について産業別に分析してみると、年度によって多少の変動はあるものの、公務員、製造業、卸売・小売業等の職種に就くものが多く、在学中に得た農学部の専門的知識を生かせる進路を選択している(表21)。

表 22 農学部卒業生の主な就職先（産業別）

		H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
応用生物科学科	1 位	公務員 (18.5%)	製造業 (27.8%) 卸売・小売業 (27.8%)	製造業 (43.3%)	製造業 (34.3%)
	2 位	製造業 (14.8%) 卸売・小売業 (14.8%)	－	公務員 (10.0%) 学術研究, 専門, 技術サービス業 (10.0%)	卸売・小売業 (20.0%)
	3 位	－	公務員 (16.7%)	－	公務員 (8.6%)
生物環境科学科	1 位	製造業 (23.7%)	公務員 (21.1%) 製造業 (21.1%)	製造業 (21.7%)	製造業 (19.6%)
	2 位	公務員 (12.1%)	－	公務員 (15.2%)	公務員 (11.8%) 卸売・小売業 (11.8%)
	3 位	卸売・小売業 (10.5%) 複合サービス事業 (10.5%)	卸売・小売業 (13.2%)	卸売・小売業 (10.9%) 複合サービス事業 (10.9%)	－
生命機能科学科	1 位	製造業 (53.1%)	製造業 (50.0%)	製造業 (67.9%)	製造業 (37.5%)
	2 位	情報通信業 (10.5%) 運輸業, 郵便 (10.5%) 卸売・小売業 (10.5%)	卸売・小売業 (14.3%)	教育, 学習支援業 (10.7%)	卸売・小売業 (16.7%)
	3 位	－	公務員 (10.7%)	－	公務員 (12.5%) 複合サービス事業 (12.5%)

(出典：農学部資料)

(水準)

進路・就職の状況は、期待される水準にある。

(判断理由)

1. 平成 22 年度から平成 27 年度までの平均就職率は、97.3%であり、九州地区の他大学の農学部と比較して高い水準にある。
2. 産業別の就職先選択の様子から、農学部で学んだ専門知識を生かした進路を選択しており、目的を持って学習に取り組んだ成果が表れている。
3. 大学院進学希望者のうち 86.1%が、本学農学研究科に進学している。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

農学部では、学生が卒業時まで身に付けるべき「佐賀大学学士力」の習得に必要な具体的な教育目標を定めた「学位授与の方針」、この目標達成のためにそれぞれの科目のつながりと開講意図を定めた「教育課程編成・実施の方針」、及び学科ごとに求める学生像と高等学校在学中に取り組んでおいて欲しい学習内容等を示した「入学者受入れの方針」の3つの方針を策定し、これらの方針に沿ったカリキュラムマップや履修モデルを学生にて提示した上で、教育活動を行うことにより、教育の質が向上した。

また、シラバスの導入や授業評価アンケートの実施に加えて、LPやTPを導入し、このデータを活用することにより、学生と教員がともに目標を共有し、より細かな対応が可能となった。さらに、入学時から卒業までの学習成果を実感できるシステムが構築され、教育効果が向上した。

さらに、LPの作成により学生自身が具体的な目標を設定することができるため、主体的な取組が可能となり、学習の質が向上した。

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

英語能力の向上のため、1年次と2年次に全学生を対象としてTOEIC試験の受験を義務化したことにより、平成25年度および平成26年度の入学生について、1年次と2年次に受験したTOEICの試験結果を比較すると、農学部全体としては平均点が向上しており、教育成果が向上した。

生命機能科学科では「学位授与の方針」に基づいた体系だったカリキュラムマップに従った教育により、毎年卒業生全てが食品衛生管理者および食品衛生監視員の有資格者となっており、教育成果が向上した。